

副詞「たっぷり」の用法にみる個人性と社会性

—広島方言若年層話者の場合—

岩 城 裕 之

1 はじめに

本論文は副詞「たっぷり」を取り上げ（注1）、その用法における個人差の実態を捉え、「たっぷり」という語の使用の社会性と個人性の関係を考察するものである。

「たっぷり」の意味枠（注2）について、対象物と状況（基準となる量に不足がなく、それを越える）という2点を取り上げ、この意味枠の拡張によって個人差がどのように出現するのかという問題、そして、この2つの意味枠すべてを満たす場合とそうでない場合はどのような個人差の状況がみられるのかという2点について考察する。なお、取り上げる対象は広島方言話者のうち若年層女性に限った。これは、話者の属性がバラバラであると、その個人差が属性の問題に解消される可能性があるため、より純粋な形で個人差の状況を把握するには、話者を限定することが良いと判断したからである。したがって本論文で使う「社会性」は、この範囲に限定された社会を意味する（注3）。

2 先行研究における「たっぷり」の意味

国語辞典における「たっぷり」についての記述の例として、小学館『国語大辞典』をあげる。

- I〔副〕 1 満ちあふれるほど。量的に十分に。たくさん。
*浮・野傾友三味線一二「たっぷりと面白い事を、うたふて聞せ給へ」
2 十分で余裕のあるさま。ゆとりのあるさま。ゆったり。
「台所の広さをたっぷりとする」
- II〔形動〕 満ちあふれるほど十分に有るさま。余裕の十分に有るさま。またその様子。
*滑・七偏人一四「其くせ趣かうは沢山（たっぷり）だ」
- III〔接尾〕 1 名詞に付いて、そのものが満ち満ちている、あるいは十分である意を添える。
「いやみたたっぷり」「色けたたっぷり」など。
2 数量を示す語に添えて、十分それに相当する意を添える。
「一合たっぷりはいる徳利」

さて、各種の国語辞典の記述も、ほぼこれに似たものであり、また、これ以上に詳しい記述もない。これらの国語辞典に共通する記述として、副詞「たっぷり」の意味は「十分に近いということがある。

- 「いっぱい」に当たるものとして「なみなみ」がある。これは液体を注ぐ場合にかぎった特製の語なのだから贅沢な語である。「たっぷり」も「たっぷり注ぐ」と言うが、こちらはその他にもいろいろ使い道が用意されている。あふれるほど、あり余るほどの状態だから、「色気たっぷり」などと、いやらしいことにも言える。

森田良行『日本語をみがく小辞典<形容詞・副詞篇>』講談社現代新書 1989
この記述からは、(1)なみなみ同様、対象物が液体であるのがもともとで、(2)有り余る、あふれるほどの多量、という2つの要素を抜き出すことができる。

- 多量を表す語としては、他に「しこたま」「たんまり」「ふんだんに」「たっぷり」「どっさり」「わんさと」などがあるが、「しこたま」「たんまり」はかなりくだけた表現で、主に金銭をもうける場合などに用い、ややマイナスイメージの語となっている。「ふんだんに」「たっぷり」は豊富・大量消費の暗示、「どっさり」は重量感を伴った多量の暗示、「わんさと」は多数の集合の暗示がある。
- 客観的に多量にあることを表す場合には、「いっぱい」「うんと」「たくさん」などを、多量にあることが好ましい場合には「ふんだんに」「たっぷり」「どっさり」などを用いる。
- この「じゅうぶん」は「たっぷり」にしているが、「たっぷり」は豊富さと大量消費の暗示があるのに対して、「じゅうぶん」は必要量を満たしている暗示が強く、豊富さの暗示は少ない。

以上3例 飛田良文・浅田秀子『現代副詞用法辞典』東京堂出版 1994
これらの記述からは(1)大量、(2)豊富の2つの要素が帰納できる。ただし、森田(1989)にみたような、対象物に関する記述はない。

- たっぷり：余裕・量感を感じさせる時間・お金・物・体積・量が十分にある。
- 「たっぷり」は何か「いっぱいある」という意味を表わすが、「体に脂肪がついている・この冷蔵庫には入る」などを修飾して、いっぱいあって「ゆとり・ボリューム」を感じさせるものには使えない。

田忠魁／泉原省二／金相順『類義語使い分け辞典』研究社出版 1998
この記述は、先の記述のうち、「望ましい場合」に用いられるという記述が欠けている。しかし、(1)多量、(2)余裕(ゆとり・ボリューム)があるという点で「ある基準値に不足がなく、それを越えるほど」、(3)時間・お金・物・体積・量について使う、の3点が帰納できる。もっとも液体に使うとした森田に対して、田らは時間・お金・物・体積・量をあげている。しかしいずれも、数ではなく量として捉えられるものである。

以上のことから、「たっぷり」の意味として、次の3つの意味枠が重要であることがわ

かる。

- ① 量が多いこと。
- ② その量とは、ある基準に対して不足がなく、それを越えているということ。
- ③ 対象物が、液体物など、数ではなく量として捉えられる物であること。

このうち、②の「不足がない」という点と③の対象物の性質について、その個人性と社会性を考察してゆくこととする（注4）。

なお、「たっぷり」の意味について、アンケートを行い自由記述をしていただいた（注5）。その結果の一部を下にあげる。（下線は筆者）

- a) 「たっぷり」とは、「いっぱい」という意味だと思う。「たっぷり」を「いっぱい」に直すと、とても言い慣れた文章になる。
- b) その時と場で十分に思える量、もしくはそれを上回る量の場合に使うと思う。音としては十分な満足な感じがする。
- c) 「たっぷり」とつくと、もうこれ以上入らない、というくらい量が多いというイメージがある。数えることが難しいもの（水とかミルク、太陽の光など）に「たっぷり」は多くついている気がする。「たっぷり」と比べて「どっさり」は少し乱雑な気がする。
- d) たっぷりはなんか水々しい（ママ）感じな音。瓶にけっこう水入れてフタしめて上下にふったかんじ。どちらかといえば、ありがたいときに使う。それが自分とかにとつて得であるとき。「台風でリンゴがたっぷり落ちた」は落ちてイヤな人はあまり使わないと思うけど、たとえばアリになったつもりで言えば「今年もたっぷりリンゴが落ちた」と言えると思う。
- e) 「たっぷり」は水もののような感じ。バケツにいっぱい水が入っているような感じがする。

傍線部は対象物について、波線部は「基準に対して不足がない」について言及した部分である。これまで見てきた意味枠とはほぼ同じ内容が書かれている。教示者の直観はこれまで整理してきた意味枠と、大きく異なるものではない。

なお、以下で取り上げる話者は広島方言若年層女性である。したがって、ここで確認した先行研究の結果がそのまま適用できるとは限らない。しかし、結果が大きくことなることは考えにくい。上に示したアンケートの自由記述においても、大きく異なる結果がでてきているわけではない。以下、これまでの結果を目安にしながら、実際にアンケートで確認する。

3 「たっぷり」の意味の個人性と社会性

調査は1999年1月と5月に、それぞれアンケートを用いて行った。なお、アンケートは

対面で行っている。

教示者は広島市生え抜きの16-20歳の女性56名で（注6）、すべて同じ学校に通う高校生と短期大学生である。この点も話者の属性を大きく変えないための配慮である。

3.1 意味枠内部での拡張と個人差

3.1.1 「基準となる量に不足がなく、それを越える」について

(1) a パイプが詰まっても水をたっぷり流せば流れます。

b 太田川には水がたっぷり流れている。

この2つの文のうち、aはパイプの詰まりをとるためにある一定量の水が必要であり、その分だけの水を流さなければならないということを表している。一方bではそのような必要量は前提とされていない。もっとも、他の川や通常の水量というものが前提とされていると考えられなくもないが、aと比較すれば、「〇〇をするために」という要素が文中にないために、相対的に必要量の前提が希薄であると考えられる。そこで、bに「たっぷり」という語を使うのは不自然であると考えられる。このことを確認するために、こういった文を用いて、許容度をはかる調査を行った。

下の表は、対象物は同じであっても、基準となる量に不足がなく、それを越えるという場合と、そうではない場合の文を対比させ、その許容度（注7）をはかったものである。数字は百分率で、網掛け部分は最も回答者の割合が多いものである。

表1 集計結果（基準）

評 価	文 例	集 計 結 果		
		自然	*	不自然
1 a 基準有	パイプが詰まっても水をたっぷり流せば流れます 太田川には水がたっぷり流れている	35.5	54.8	9.7
b		6.5	16.1	77.4
2 a 基準有	この駐車場は広いから車がたっぷり止まります 駐車場に車がたっぷり止まっている	22.6	0.0	77.4
b		0.0	12.9	87.9

*は、言えないことはない、をあらわす。

1の a、bは、いずれも対象物が液体物（水）である。うち、何らかの基準量が明確な文はaであると考えられる。この場合、言えないことはないという回答が最も多く、自然であるとする回答が2位を占めている。

一方2は対象物が車であり、可算物（量ではなく数で数えられるもの）となり、対象物の点からは自然であると考えにくい文ではある。いずれの場合も「不自然」とする回答が最も多い。しかし、aは「駐車場が広いために、通常の駐車場よりも多くの車を止めることができる」という意味のことを言っており、通常の駐車場に止められる車の量（数）と

いうのが基準値と考えられる。しかしbでは「いつもより多い」などの基準がはっきりと明示されていない。そのため、aでは「不自然」が多い一方で「自然」であるとする教示者が2割あり、bは、これを「自然」とする教示者が0になったと考えられる。

しかし、対象が不可算物(数で数えられないもの)の場合には、必ずしも基準値が明示されるような文になっていない場合でも、これを「自然」であるとする教示者が0ではないことから、基準を越えるということ以上に対象物という意味枠が働いていると考えられる。

3.1.2 対象物について

2でみたように、対象物は基本的には数えられないものであると考えられた。国語辞典等であげられている例文は「バターをたっぷりとぬる。」「台所の広さをたっぷりとる。」などであり、「バター」も「広さ」も個として数えられるものではない。量として捉えられるものであるといえる。

さて、量として捉えられる物の中には液体物、ゲル状の物質(ジャムや味噌など)や気体などがある。その一方で、固体物であってもそれが容器に入っていて、それ全体の量として捉えている場合もある。

- (1)a 醤油が瓶にたっぷり入っている。
- b お金をたっぷり使った。
- c 映画をたっぷり楽しんだ。

(いずれも作例であるが、アンケートの質問文に用いた)

これら3つの文にはいずれも「たっぷり」が使われているものの、aの場合は対象物が「醤油」、bは「お金」、cは数量副詞というよりも状態程度の副詞になっている。これら3つの文は対象物のドメインが異なっており、さらにcでは対象物のドメインが異なることで、数量副詞からも離れている。しかし、これらの用法に全くつながりがないわけではない(注8)ことが指摘されている。aでは液体物という有形の無生物の量が大きく、体積としてみて多量であったものが、bという中間形式を経て、「物」ではないため体積などでは表されないが、尺度として多量であるという、cのような用法が生じていると考えることができる。

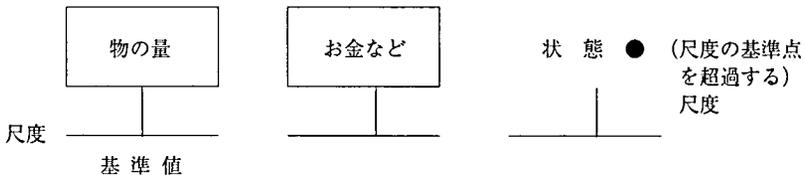


図1 拡張関係

つまり、この3つの文を対象物の拡張関係として捉えた場合、最も基本的な用法とされ

るaから、概念メタファーによる拡張事例としてbやcを捉えることができるということである。このように説明した場合には、拡張前の用法と拡張後の用法では許容度の差がでるものと予想される。

以下、アンケートの結果を示す。集計結果は、左からその用法を「自然」「言えないことはない」「不自然」と答えた教示者の割合を百分率で示した（注9）。なお、例文については、できるだけ述部を「ある」、またはそれに似たものにそろえた。

表2 集計結果（対象物）

評 価	文 例	集 計 結 果		
		自然	*	不自然
①集合名詞 液体	コップに水がたっぷり入っている。	66.7	5.6	27.7
	お酒をたっぷり注ぐ。	66.7	27.7	5.6
	瓶に醤油がたっぷり入っている。	69.7	15.2	15.2
①ゲル状物質	瓶にジャムがたっぷり入っている。	67.7	19.4	12.9
	樽に味噌がたっぷり入っている。	54.5	27.3	18.2
②固体物 (集合)	野菜がたっぷり入っているカレー。	90.3	9.7	0.0
	具がたっぷり入っている肉まん。	86.7	6.7	6.7
③固体物 容器性あり	箱に林檎がたっぷり入っている。	22.6	61.3	16.1
	ボールに苺がたっぷり入れてある。	6.7	46.7	46.7
	パンにレタスをたっぷりのせる。	20.0	46.7	33.3
容器性なし	奈良には寺がたっぷりある。	0.0	9.6	90.3
	壁に絵がたっぷりかけてある。	0.0	0.0	100
	車がたっぷり走っている。	0.0	3.3	96.7
④生物 容器性あり	ゴキブリホイホイにゴキブリがたっぷり入った。	16.1	48.4	35.5
	水槽の中で魚がたっぷり泳いでいる。	3.2	16.1	80.6
容器性なし	このあたりには野良猫がたっぷりいる。	0.0	22.6	77.4
	あの家は犬をたっぷり飼っている。	3.2	12.9	83.9
抽象概念	時間はたっぷりある。	87.0	12.9	0.0
	愛情がたっぷり入った手作りチョコ。	77.4	16.4	6.5
	疲れがたっぷりたまった。	22.6	16.1	61.3
動詞	映画をたっぷり楽しんだ。	22.6	35.5	41.9
	昨日は一日たっぷり遊んだ。	38.7	41.9	19.4

*は、言えないことはない、をあらわす。

集計結果のうち、最多のものに網掛けを施した。網掛けの部分を見ると、まず、具体物が対象になる場合、②の固体物（集合）が対象になる場合と、抽象概念が対象物となって

いる場合に許容度が高いことがわかる。いずれも数量を数で捉えられる対象物ではない。①の液体物も、これらに次いで許容度が高い。また、同じ性質を持つ物質の場合でも、液体などのように容器に入っているかどうかで許容度に差があることがわかる。この「容器」の存在は、対象物を数として捉えるか、量として捉えるかという、捉え方に関わっているのであろう。

例えば③の名詞の場合、容器性のない例文の場合には「不自然」とする教示者が最多となるものの、容器性のある例文になると回答のゆれが大きくなる。「言えないことはない」とする教示者が増えている。同様のことは対象物が生物の場合にも指摘できる。また、「箱にリンゴがたっぷり入っている。」「ボールに蔓がたっぷり入れてある。」「パンにレタスをたっぷりのせる。」のように、対象が固体物であり、数で数量を表すことができる物ではあっても、それが存在している状況に容器性がみられ、量として捉えることができる場合には、回答が分散する傾向が見られる。これは、液体のように容器に入っているために数ではなく量で捉えることができるものの、対象物自体は数えられるものであるという、一見矛盾する状況が要因であると考えられる、量を表す副詞「たっぷり」を使用するにあたって、その判定が困難になる条件を抱えているのである。

さて、このように回答内容が分散している状況は、個人性が高いと言える。これは、対象物そのものが数で捉えられるものの、存在している状況は容器性があるという場合、教示者がどのように状況解釈したかによって許容度にばらつきが生じているのであろう。したがってこの場合の個人性の高さは、副詞「たっぷり」の意味が異なるということではなく、状況認識の違いによる用法解釈の違いということになる。

さて、②固体物（集合）と同じように許容度が高かった例文に、対象物が抽象概念である「時間はたっぷりある。」があった。9割の回答者がこれを自然と答えている。一方、対象物が同じ抽象概念でも「疲れがたっぷりたまった。」だけは、これを「不自然」とする教示者が多くなっている。これについては、述部を「ある」に近い語をアンケートの文例として採用したために起きた現象であると考えられる。すなわち、「時間がたっぷりある。」「愛情がたっぷり入った手作りチョコ。」のように、時間があること、愛情があることは、何かの基準に対して、そのものが十分基準を満たしており、望ましいというニュアンスを持つ。一方、疲れの場合はそうではない。例えば「時間がたっぷり足りない。」のように、時間がない場合は、許容度が下がることが予想される。対象物以外に、「多量にあることが望ましい場合かどうか」という要素が関わっているように考えられる。しかし、③固体物の「壁に絵がたっぷりかけてある。」のように、ものが多く存在している場合でも使えない場合があることと比較すると、抽象概念が対象物になり得ることは指摘できよう。

最後に、対象が動詞になる場合は、いずれの場合も直接的に「もの」の量を表しているわけではないため、「不自然」とする教示者が最も多い。

3.2 2つの意味枠の存在と個人差

先に、2つの意味枠それぞれについて、「基準を越える」「対象は量で捉えられる物」という条件から離れるものは、その許容度が下がるということを見てきた。しかし、抽象概念が対象物となる場合に見られたように、これら2つの意味枠を全く切り離して考えることは非常に困難である。

本項では、文例を一つ一つ意味枠に分解せず、文例を複数準備し、それぞれについて「たっぷり」の使い方が自然であるか、不自然であるかを問う質問調査の結果を報告する。この結果を集計した図が、図2である。アンケート結果を、自然であるという回答が優勢な文から、不自然であるという回答が優勢な文へと並べている。なお、この連続性を確認するために折れ線グラフの形状にして示したが、何らかの変化を表すという折れ線グラフの意味は持たせていない。

最も許容度の高い文は「おいしいのはミルクをたっぷり入れたカフェオレ」である。「パンにジャムをたっぷりぬればおいしいよ」が続く。対象物に関して、容器性を持った対象物、または容器に入った対象物を取り（以下容器性とよぶ）、それが望ましい（必要量を満たし、不足がない）という文脈であるという、2つの意味枠を同時に満たす文例である。「野菜が入ったカレー」も同様である。これらはいずれも9割以上の教示者が「自然」であると答えている。また、「時間はたっぷりある」の場合、容器は具体的に存在していないものの、量として捉えられる対象物で、かつ、何らかの基準（何かをするために必要な時間）を満たしているニュアンスを持つと考えられる。6位、7位の「瓶に入っている」の文では、瓶という基準量に不足がないということに合致はしているものの、入っているのは瓶に入る基準量だけで、それを越えるということを考えにくい文であるために許容度が若干下がったと解される。さらに12位「おいしそうにリング」の例文から16位「ゴキブリホイホイ」の例文までの、「言えないことはない」が最多となり「自然」「不自然」の回答が入り乱れたものをみると、「リング」の場合は対象物が加算物であるという性質を持つものの、容器とみなされるものがあり（この場合は皿）、数ではなく全体量として捉えられたと考えられる。また、心的な基準が想定され、基準に不足がないというニュアンスを全く感じさせない文ではなく、むしろ「おいしそう」という表現からは、このようなニュアンスを導き出すことができそうな文である。「ゴキブリホイホイ」の例文の場合、気が済むまで駆除した、ということであろう。これらと同じように、心的基準があると考えられる文が「映画を楽しんだ」「疲れがたまった」などの文例である。これらは対象が具体物ではなく、心情の度合いに変わっている。「具体物の量」が比喩的操作を経て「尺度としての量」に拡張した文例であると考えられ、この点上位の文例に比べ「たっぷり」が使いにくくなったものと考えられる。しかし、何らかの基準となる量に不足がなく、それを越えるという点については、これを満たしていると考えられよう。ただ、この2文については、2つの意味枠の関係というよりも、対象物が何であるかという、対

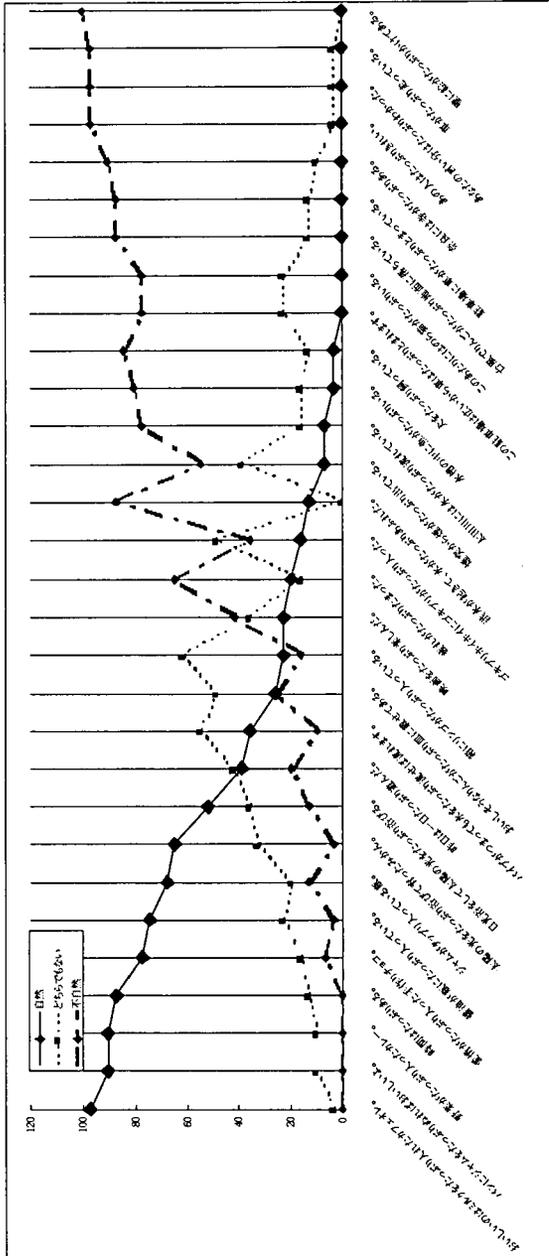


図2 許容度 (グラフ形式で表示)

象物に関する意味枠の拡張の問題であると考えられるため、ここではそれ以上の指摘を避ける。

次に、さらに下位にある文例をみてゆく。「自然」とする回答が0%、「言えないことはない」も10%を切る文例は次のようなものである。「奈良にはたつぷり寺がある」「あの人はたつぷりきれい」「あなたの言い分はたつぷりわかった」「車がたつぷり走っている」「壁に絵がたつぷりかけてある」。これらの文は「たつぷり」の意味枠の条件を満たしていない。特に「壁に絵がかけてある」の場合には、絵を量として捉えることもできず、必要量に不足がないという状況の文でもない。したがって回答は「不自然」が100%であり、不自然であるという社会性が高くなっている。

つまり、2つの意味枠を両方満たしている場合には「自然」であるとする回答者が多く、意味枠のいずれか一方しか満たさない場合にもっとも個人差が大きくなる。しかし意味枠を満たさないもの場合には「不自然」とする教示者がほとんどで、これもまた社会性が高くなっていることが指摘できる。

3.3 結論

以上の考察から次の2点が指摘できる。

- ①意味枠内部で、それが拡張した場合、拡張すればするほど個人差が大きくなる。つまり、自然であるという社会性が希薄になってゆく。しかし拡張がある程度のところまでいってしまうと、今度は不自然であるという回答が増え、この点での社会性が増大する。
- ②複数の意味枠から語の意味が規定できる場合を考えてみる。「たつぷり」の場合、ここで取り上げた2つの意味枠のうち、その両方を満たしている場合には「自然」であるとする回答者が多く、意味枠のいずれか一方しか満たさない場合に回答が割れ、もっとも個人差が大きくなる。しかし、意味枠を全く満たさない文の場合には「不自然」とする教示者がほとんどで、「不自然である」という点において社会性が高くなっていることがわかる。

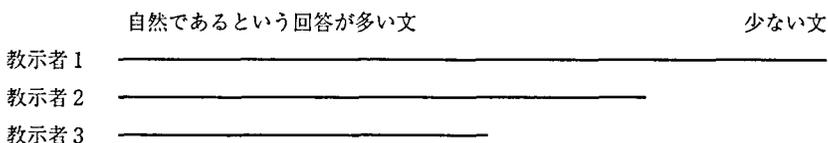
4 教示者別にみた場合の状況

これまで、回答内容を統計的に処理するという巨視的視点から個人差の出現状況を観察してきた。用法が拡張してゆくに従って、連続的に許容判断にばらつきがみられるということ（特に対象物の枠の場合）、また、2つの意味枠のうち、両方がそろっていない場合にばらつきが出るという2点を指摘できるのであるが、それぞれの話者が全く異なる意味枠によって「たつぷり」という語を捉えていないことを確認するため、教示者別の回答内容を表3に示す。自然であると判定した文例が重なり合い、相補的な分布となっていないことをまずは確認する。

上段のAからAEが教示者を示し、左に文例をあげた。文例は、それを自然な文であると回答した教示者数の多いものから順に並べてある。右の数字は、1がその文例を「自然」であると答えたことを、2は「言えないことはない」、3は「不自然」の回答を表している。

この結果からは、教示者Aの場合は「たっぷり」の適用範囲が広く、AEの場合は狭い、と説明できる状況にある。どの教示者についても1（自然）が連続した後には2（言えないことはない）が連続して出現、その後3（不自然）が続くという、ほぼ傾向を見せている。すなわち、不自然であるという回答が多い文の場合、それを自然であると考えた話者は多くの文について自然であると考えている話者である。

以上の状況を模式的に表したのが下図である。それぞれの教示者が自然であると考えている範囲を棒線で示した。



このように各教示者の許容判断がそれぞれの教示者の中で連続的で、その連続性が先に3で見てきた現象と一致することは重要である。意味枠が失われてゆくに従って個人による許容判断のばらつきが大きくなるのは、ある特定個人の中でも同様に許容判断に揺れが生じているということだからである。少なくとも、重なる部分ではコミュニケーションは満足な形で成立する。

さて、教示者AやBは自然であると判定した文の多い教示者である。Aの回答内容について検討すると、対象物が量として捉えられるもの、また、「たっぷり楽しんだ」のように、尺度としての量を表している場合も自然であると判定している。「箱にリンゴが入っている」の文例を不自然としていることから、このような傾向が看取される。対象物が条件を満たしていない場合には、言えないことはないという微妙な判断を下している。「奈良には寺がある」の場合、言えないことはないと回答しているが、これも量として捉えられなくはない。そしてこの文例の場合には、観光として寺巡りを想定した場合にはそれを満足させるだけの寺がある、という解釈を経ることで、基準となる量に不足がなく、それを越えるという意味を引き出すことも可能であろう。また、教示者Bは対象物がたとえば「ゴキブリ」や「リンゴ」のような可算物でも、「ゴキブリホイホイに入った」という場合には自然であると考えている。ゴキブリを量として捉えたのであろうか。これらの教示者は、「たっぷり」の意味枠のいずれか一方を満たすと考えられる場合、あるいは解

釈によっては満たすことができるような文の場合には「たっぷり」を使えると考えられる傾向にある。また、特に対象物など、量で捉える具体物以外が対象となった場合でも自然であると考えており、意味枠の拡張事例についても許容する傾向にある。

一方、教示者A C、A D、A Eが自然であると判定した文は少ない。3人が同じ文に同じ判定を下しているわけではないが、いずれも対象は量として捉えられるもので（A Dの「時間がある」だけは尺度で例外）、特に基準量に不足がないという意味を伴っていると考えられる文に自然であるという判定を下している。また教示者A C、A Dの場合には、言えないことはないという判定した文例が、教示者Aが自然であると判定した文の範囲にはほぼ一致している。「醤油」「ジャム」が単に「瓶に入っている」場合に、基準量に不足がなく、それを越えるほど、という意味を引き出すかどうか（ジャムや醤油が瓶に入っているのは基準量だけで、それを越えるということもなければ越えることもないと考えることもできる）の違いがあったのであろうか。とすれば、教示者A C、A D、A Eは、「たっぷり」の意味枠のすべてを十分満たすと考えられる文の場合にしか自然であるという判定を下していないということになる。また、対象物に注目すると、A Dが自然とした時間の文例をのぞいて、いずれも「量」として捉えられる具体物が対象となっている。これは3.2で考察したとおり、対象物の意味枠のプロトタイプ的な部分と一致する。すなわち、意味枠そのものも、プロトタイプ的な場合のみに自然であるという解釈を与えているのである。そしてその他の教示者はその中間の傾向を見せる。

5 おわりに

「たっぷり」を例に、その使用の個人性と社会性の状況を観察してきた。

「たっぷり」の意味枠で今回扱ったのは2つの枠であった。これが両方備わっていることが明らかな文の場合、許容度が高い。そして、意味枠を満たしていることが明らかでないような文になるほど、許容度は下がってゆく。これを各個人の認識として考えた場合、その両方を満たしていればよしとするのか、それとも片方でもあればよいのかという点において個人によって差が生じていることがわかる。

また、意味枠内部でも拡張がおこると許容度は下がる、例えば対象物が具体物でなくなり、尺度としての多量をあらわすような場合には、人によっては不自然な文と判定されることになる。今回観察した最も許容範囲の狭かった話者の場合、これら3つの枠を同時に満たすことが必須である。また各教示者は、自然であるという回答が次第に減ってゆく段階の途中に位置づけられる。

まず、カバー範囲の最も広い話者の場合、対象物がリングゴである「箱にリングゴがたっぷりはいっている」という文をが自然であるとする。一方、狭い話者の場合、この文は不適であった。このとき、この2人はお互いに、2人の間には差があると考えられるであろう。し

かし、全員が自然であるとする文があり、ここに一致が見られるということからは、この2名は決して違う意味を認識しているのではないといえる。リンゴの例文を許容できない一方の話者は、リンゴは「数」として捉えられるために、「量」として捉えるのがプロトタイプとなる「たっぷり」は使えないと判断し、一方の許容できると答えた話者は、リンゴが存在する状況に容器性を認め、これを「量」として捉えているのではないかということが考えられる。すなわち、意義特徴「対象は量として捉えられるもの」そのものは高い社会性を持ち、その適用について個人差が生じているという関係である。

今回取り上げたのは「たっぷり」という一語であった。しかし、数量副詞体系として考えたとき、意味枠の拡張ということが他の語との張り合い関係に影響を与えるということも考えられる。これにより、各個人が異なる形の体系を持つことになるのかという問題について、詳しく考えてゆく必要があろう。今後の問題でもある（注10）。

参考文献：

- F.ウンゲラー/H.-J.シュミット 池上嘉彦ほか訳(1998)「認知言語学入門」大修館書店
河上誓作(1996)「認知言語学の基礎」研究社出版
Taylor, John (1993) 'Some pedagogical implications of Cognitive Grammar'
In: Geiger and Rudzka-Ostyn 201p-226p (「認知言語学入門」325p)

なお引用文献は本文中に示した。

- (注1) 国語辞典の記述をあげるまでもなく、「たっぷり」は共通語である。共通語である「たっぷり」を広島方言話者に対して調査することに問題があるかもしれない。しかし、すでに広島における老年層にも広く使われており、すでに広島において定着した語であると考え。また、共通語形を扱いながらも、話者の属性や地域を限定することは、より具体的なデータを得るという点で、効果的であろう。
- (注2) 意味枠は、意義特徴と区別して用いる。個人差を問題にした場合、その回答内容に揺れが生じるため、いわゆる意義特徴を記述することはできない。したがって、例えば「タップリ」を、数ではなく量について使う、と記述しても、そこに揺れが生じる場合があろう。このため、この記述を一つの枠として捉え、この記述からどのように拡張し、また、揺れが生じているのか、という形で記述を行うことにする。そのために、意義特徴と区別した。
- (注3) 本論文で問題にする社会性は、広島市という社会を問題とするのではない。本論文では若年層女性という部分的な社会に限定し、その後、徐々に社会を広げてゆく形で最終的な社会を確定したいと考える。現状では社会のある一部分を切り出して、そこでの個人差を論じていくのが有効であると考え。
- なお男性教示者を対象にしていないのは、語の所有の段階での個人差が現状でみられているか

らである。

さらに、年齢の問題もあろう。今回対象とした教示者はいずれも学生であり、社会人ではない。いわば「社会化」される前の人々である。社会人との比較は、今後の課題である。

(注4) 「たっぷり」を多量について使うことの個人差がみられなかったことは、助詞「しか」との共起関係などのテストで、すでに指摘している。(岩城「方言語彙の個人差」 「方言語彙論の方法」和泉書院 2000など) なお、「どの程度の量なら多量と認識されるのか」という問題は扱わない。「多い」か「少ない」かは、語の意味に関わる問題というよりも、対象そのものの認識に関わるからである。

(注5) 3でアンケート調査を行った教示者。アンケートの中に、「タップリ」の意味について自由記述を行う箇所をもうけた。

(注6) 注3に同じ。

(注7) 言うか言わないかを問うよりも、その文を聞いて自然か不自然かを答えるほうが、語の意味の理解を問題とする場合には自然であると考えられる。

(注8) 高水徹「認知的視点からみた量・程度表現の拡張プロセス」第1回日本認知言語学会ハンドアウト、2000

(注9) 小数点以下第2位を四捨五入。以下、表などで百分率で表示したのものには、すべて同じ処理を行っている。したがって、合計が100%を越える場合もある。

(注10) 岩城(2000)でその一部についてはすでに述べた。

なお、「たっぷり」の使用に関して(本論文の場合は、例文が自然かどうかの判断)、教示者はまず、ある対象物についてそれを液体物とみるか、また、ある物を容器とみるかという許容判断と、ある状況に対して、それを望ましいほどの多量とみるか、という許容判断を行っていると考えられる。次に、先に示した2つの意味枠をどこまで拡張して考えるのか、という問題が発生する。液体物でなくてはならないという条件に目を閉じ、望ましい、ということのみに焦点を当て、「自然な文」であると判断するかどうかという、次のレベルでの許容判断が考えられる。

第1にあげた、対象そのものの許容判断と、第2にあげた意味枠の許容判断が副詞「たっぷり」の使用場面の個人差を生んでいると考えられる。副詞を取り上げた今回の考察では、この2段階の許容判断が個人の中で働いたものと推察されるが、副詞の場合、これを明確に区別することは非常に困難であろう。また、(注6)で対象そのものの認識は問題としないと指摘したものの、細かなレベルでの意味を問題とした場合、やはり全く無視して進めてゆくことに問題はあろう。この克服が将来的な問題になろう。しかし、「たっぷり」に関してのみ言えば、対象そのものの許容判断と意味枠の許容判断の2段階の判断が必要であるからこそ、個人差の存在が生じ、それが重要であるとも言える。個人差がクッションの働きをし、コミュニケーションを円滑に成立させていると解釈することもできるのである。